

## 20世紀初頭イギリスにおける女性の柔術実践： サフラジェットの護身術という理解をこえて

平岡麻里（星槎大学）

本発表は、20世紀初頭イギリスの女性参政権運動において、柔術サフラジェット(Jujitsufragettes)とよばれる柔術を護身術として学んだ武闘派女性参政権運動家たちに柔術を指導したことにより、この時代の女性柔術家として最も著名なイーディス・ガラッド(Edith Garrud)について再検討し、女性参政権運動との関連で論じられてきた女性による柔術実践に新たな理解を提供することを目的としている。

20世紀初頭イギリスにおいて柔術を実践した女性たちの存在は現在でも多くのクリエイターにインスピレーションを与え続けている。例えば、910年代に参政権を求めて戦った女性たちを描いた映画『未来を花束にして』(原題: *Suffragette*, 2015)では、ガラッドをモデルとしたとされる主要登場人物の一人が柔術を指導する場面が描かれている。また、ナンシー・スプリンガーによる青少年向けミステリ小説シリーズの主人公、シャーロック・ホームズの妹エノーラは、失踪した母親(女性参政権運動活動家とされる)から習った柔術を使い事件を解決する。このシリーズは2020年にNetflixで『エノーラ・ホームズの事件簿』(原題: *Enola Holmes*, 2020)として、2022年秋には続編が公開された。

これらの娯楽作品の背景となった20世紀初頭のイギリス女性参政権運動活動家による柔術実践は、新聞・雑誌などの報道によりイギリス社会では当時においても広く認知されていた事実である。また近年では、2018年のイギリス女性参政権100周年を契機に学校教育の現場や博物館の展示テーマとして取り上げられる機会が増えたことにより、以前は男性中心で語られる柔道史に花を添える、あるいは男性社会に挑む勇敢な女性のエピソードとして扱われることが多かったこの事象が、体育史、社会史、文化史、文学史など様々な分野で中心的な研究テーマとして取り上げられるようになってきている。

しかしながら、ガラッドも当時の女性一般の柔術実践も、女性参政権運動になかでも過激な武闘派として知られる女性社会政治同盟(WSPU)との関連で、いわば特殊ケースとして扱われ、柔術が日本由来であることや、イギリスにおいては特に上流の女性を中心に流行していたことを自明のこととしたまま、対象となる個人や当時の社会状況のユニークさを前面に押し出す傾向が依然としてみられる。

本発表では、こうした研究動向を踏まえ、他にも武術や体術が紹介されているなかで、なぜ彼女たちが日本の柔術に注目し、実践するに至ったのか、それが彼女たちのその後の人生にどのような影響を与えたのか、というイギリスを研究対象とする日本人教育史家として当然持つべき問いに答えるため、著名でありながらまだ多くは解明されていないガラッドについて、2023年春に実施した現地調査で得られた新情報とイギリス研究者の知見をもとに報告する。

具体的にはガラッドを英雄的な柔術サフラジェットとしてではなく職業と家庭をもつ一人の女性として捉え、(1)ガラッドについての事実の整理、(2)女性参政権運動だけでなく当時のイギリスにおける女性の社会・文化・教育的状況を踏まえたガラッドの言動の考察、(3)柔術実践という形であらわれた当時の日本の文化や教育の伝播、という3つの視点から再検討を試み、日本の柔術が当時のイギリス女性の社会的文化的経験に与えた影響を考察する。